

乳幼児期の身体活動に関わる環境についての研究(2) —「身体活動に関わる保育環境尺度試行版」の作成—

松寄洋子¹⁾*・石沢順子²⁾・土橋久美子²⁾

¹⁾千葉大学・教育学部

²⁾白百合女子大学・人間総合学部

A Study on the Impact of Environment on Physical Activities During Infancy (2) —Development of a Scale for the Evaluation of Physical Activity in Childcare Environment—

MATSUZAKI Yoko¹⁾*, ISHIZAWA Junko²⁾ and DOBASHI Kumiko²⁾

¹⁾Faculty of Education, Chiba University, Japan

²⁾Faculty of Human Studies, Shirayuri University, Japan

乳幼児期から身体活動を促進して体を動かす習慣を身に付けるためには、乳幼児の健やかな発達につながる保育環境を構成することが不可欠である。しかし、3歳未満児を対象とした保育環境の評価スケールのうち、身体活動に特化した尺度は国内ではまだ作成されていない。

本研究の目的は、3歳未満である幼児初期の子どもの対象とした「身体活動に関わる保育環境尺度」の試行版を作成・実施し、身体活動に関わる保育環境の構成要因を検討することである。保育者55名に試行したところ、「外部の関与と計画評価」「保育者の関わりと子どもの状況」「物的環境と空間・機会」の3因子が抽出された。「外部の関与や保育計画」は「物的環境」「保育者の関わり」と強く関連しており、第三者の関与や保育計画や記録などが保育実践と関連していることが示唆された。担当クラスや経験年数と各因子間に有意な関連はなかったが、保護者に関する項目では経験年数と関連する傾向があった。

キーワード：乳幼児期 (Infancy), 身体活動 (Physical Activities), 保育環境 (Childcare Environment), 評価スケール (Evaluation Scales)

1. 問題と目的

近年、社会環境の急激な変化に伴い、子どもの遊びの様相が変わってきてメディアやゲームに取り組む機会や従事する時間が増えてきた (Yipら, 2015)。そのため、外で身体を動かして遊ぶ経験が少なくなっている (Tanock, 2014)。日本においても、身体活動時間の減少や体力・運動能力の低下が報告されている (スポーツ庁, 2019)。これは学童期以降だけの課題ではなく、幼児の運動能力も低下傾向がみられることが明らかとなった (杉原ら, 2004)。このような現状に対して幼児期運動指針 (文部科学省, 2012) が策定され、「様々な遊びを中心に、毎日、合計60分以上、楽しく体を動かす」ことが推奨されている。

WHO (世界保健機関: World Health Organization) は2019年に、5歳未満の身体活動、スクリーンタイムや睡眠時間を含めた行動ガイドラインを策定した。就学前の幼児だけでなく、1・2歳の子どものついて、一日に少なくとも180分の身体活動をするべきであるとしている。乳幼児期から、睡眠時間と体を動かす遊びの時間を確保することが、成長後の小児肥満や病気の予防、さらに身体的・精神的な健康やウェルビーイングの向上に寄与すると述べている。

一方、2歳児の基本的動きの経年変化を母子遊び場面で検討した研究の結果からは、しゃがむ、かがむ、またぐなど不安定な姿勢の種類が以前に比べて少なくなった (坂上・金丸, 2017)。また石沢ら (2018) は、保育所2歳児クラスに在籍する子どもの身体活動量を調査した結果、子どもの活動量に男女による違いがみられ、性差が出現している可能性を示唆している。これらの研究結果から、3歳未満である幼児初期の子どもについても多様な動きや身体活動量を確保するための工夫が必要だと考えられる。しかし幼児初期の子どもは、身体活動ができる環境を自ら構成したり、体を動かす場面を選択して遊んだりすることができないため、保育者による援助が欠かせない。

また秋田ら (2019) は、「乳児期において、身体を動かす環境が乳児の発達と密接に結びついている」と述べている。園庭環境と子どもの活動に関する先行研究によると園庭の有無により、子どもの歩行の機会や歩数に影響を及ぼし (長谷川・定行, 2020)、園庭の広さなど物理的な環境が活発な子どもに対してより有効に機能したことが報告されている (野中ら, 2017)。

屋内環境についても、保育室を動的活動と静的活動の場所に分けると、静的活動に落ち着いて取り組むようになり、動的活動・静的活動共に活動の種類が多様になった (汐見ら, 2017)。また庄司ら (2019) は、室内外の遊具を用いて全身を使うダイナミックな遊びの中で子ど

*連絡先著者：松寄洋子 ymatsuzaki@chiba-u.jp

もが経験した動きの要素が経験した時点で出現するだけでなく、その後の遊び活動においても様々な形で展開されたことを明らかにした。このように、保育における物理的な環境は子どもの身体活動の量や動きの種類に影響を及ぼしていた。

保育環境は、物理的環境だけでなく、保育者や仲間などの人的環境がある。松寄 (2019) によると、園での保育内容は幼児の動きの種類を獲得と関連しており、保育活動を決定する保育者の身体活動に対する意識が子どもの経験に影響を及ぼしていることが示唆された。横山ら (2012) や長江・伊藤 (2018) は、保育者が保育環境を工夫した介入を行うことによって、子どもの主体性が発揮され、遊びの内容が変化したことから、人的環境が子どもの身体活動に関連することが明らかにした。

保育環境の質を測るスケールは、MOVERS (Archer Carol & Siraj Iram, 2017), ITERS (Harms Telma et al., 2017), SICS (Laevers Free, 2003) など欧米で作成されたスケールがある。また日本では「保育の質評定尺度：観察評定、環境尺度」(秋田, 2016) が作成されている。松寄ら (2021) は、国内外の保育環境に関する評価スケールを分析したところ、空間や物などの物的環境、子どもや保育者などの人的環境などの保育環境を直接構成する指標が多い傾向がみられたことを報告している。

特に3歳未満の幼児は、運動発達やスキルの違いが大きいため、集団での活動よりも個別に活動に取り組むことが中心であり、一人一人の子どもの興味関心や保育者と関わりに関する指標が多かった。それに対して、3歳以上児を対象とした身体活動の評価スケールでは、保護者や専門家などの外部の人的環境や他領域とのつながりを意識した指標が含まれていた。教育委員会や指導者などの専門家と連携し知見に基づいた専門的な指導を受けることによって子どもの運動能力が向上したり (鈴木, 2017)、保護者等と一緒に身体活動に組織的に取り組むことによって、子どもも積極的に取り組むようになった

りするなど (山下・鳥居, 2016)、園のスタッフではない外部の人の関与の影響を指摘する報告もある。そのため、第三者と連携する項目も保育環境として考慮することが望ましいと考えられる。

これらの視点を踏まえて、3歳未満児の身体活動を評価することができる保育環境尺度を作成することが、身体活動を促進して乳幼児の健やかな発達につながる保育環境を構成する上で不可欠であると考えられる。しかしながら3歳未満児を対象とした保育環境の評価スケールのうち、身体活動に特化したものは国内ではまだ作成されていない。

そこで本研究では、3歳未満である幼児初期の子どもを対象とした「身体活動に関わる保育環境尺度」の試行版を作成・実施し、身体活動に関わる保育環境の構成要因を検討することを目的とした。

2. 方法

(1) 調査対象者

幼児教育研修に参加した保育者68名を対象に、研修会場でアンケート調査「身体活動に関わる保育環境尺度(試行版)」を実施した。各項目について、対象者の担当クラスに関わらず「3歳未満児クラスの状況」について回答してもらった。56名から協力が得られ、そのうち、回答に不備があった1名を除外し、55名を分析対象とした(表1)。

分析対象者が所属する施設種別は、保育所が39名、認定こども園は12名、家庭的保育事業施設が1名、認可外保育施設が3名、無回答2名であった。現在、担当している年齢クラスは、3歳未満児クラス20名(乳児2名、1歳児6名、2歳児9名、3歳未満合同3名)、3歳以上児クラスは22名(3歳児8名、4歳児9名、5歳児5名)、フリーや主任等その他は13名だった。また、保育経験年数は2~4年11名、5~9年25名、10年以上19名だった(表2)。

表1 対象者の種別・担当クラスの人数(名)

担当クラス (%)	施設種別				合計
	保育所	認定こども園	家庭的保育事業施設	認可外保育施設	
3歳未満児クラス	15 (75.0)	2 (10.0)	1 (5.0)	2 (10.0)	20 (100.0)
3歳以上児クラス	15 (68.2)	7 (31.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	22 (100.0)
その他	9 (69.2)	3 (23.1)	0 (0.0)	1 (7.7)	13 (100.0)
合計	39 (70.9)	12 (21.8)	1 (1.8)	3 (5.5)	55 (100.0)

表2 担当クラスの保育経験年数の人数(名)

担当クラス	保育経験年数			合計
	2~4年	5~9年	10年以上	
3歳未満児	3	13	4	20
3歳以上児	6	7	9	22
その他	2	5	6	13
合計	11	25	19	55

(2) 調査時期

2020年12月

(3) 調査項目と質問紙の構成

MOVERS, ITERS, SICS等を参考にして、乳幼児の「身体活動に関わる保育環境尺度(試行版)」を作成した(表3)。

調査項目は、「物的環境」「人的環境(内部)」「人的環境(外部)」「計画・記録・評価」の4つのカテゴリ、合計36項目である。

「物的環境」は、「乳幼児のために、有効に保育室や廊下などの園舎の空間が活用されている」「戸外に乳幼児が占有して粗大運動遊びができる場がある」など、保育室だけでなく廊下等も含めた屋内や戸外における、遊具、材料、教材などに関する13項目で構成した。

「人的環境(内部)」は、「乳幼児は、遊具や材料、活動(遊び)を自分で選び、主体的に取り組んでいる」「保育者が、手本を示すなど乳幼児が新しい動きを獲得したり、むずかしい遊びに挑戦したりするように助ける」など、保育者の援助や支援、励ましなどの子どもとのやり取りに関する10項目であった。

「人的環境(外部)」は、「保育者は、乳幼児の体を動かすことのプロセスを評価する際に、保護者の考えを定期的に求めている」「保育者は、乳幼児の発達の遅れが認められた場合、必要に応じて専門家の支援を得て、評価し計画を立てている」など、保育に日常的に関わっているわけではない保護者や専門家に関する7項目で構成した。「記録・計画・評価」は、「保育者は、乳幼児の微細運動・粗大運動スキルの発達を写真、ビデオ、オーディオ、観察ノート等によって記録し、その成長を観察している」「保育者は、観察した乳幼児の身体発達を評価して、カリキュラムの枠組みや発達の指標と関連づける」など、保育の計画や振り返り、評価に関する6項目で構成した。各項目について「大変あてはまる」「あてはまる」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」の4つの中で乳幼児(3歳未満児)クラスに最

もあてはまるものを選択するように求めた。また、答えづらい項目や分かりづらい項目があるかについても、記載するように求めた。

(4) 倫理的配慮

千葉大学教育学部生命倫理委員会の承認を受けて実施した(受付番号:131)。アンケート調査は、園名や氏名などの項目はなく、個人が特定されないように作成した。データは、厳重に管理した上で保存すること、研究成果を発表する際には個人や園が特定されるような情報は公開しないこと、研究参加は任意であること等を説明の上で調査用紙を配布し、回答を求めた。アンケートの最初に調査協力の可否項目を設定し、応諾を得た。

(5) 分析方法

IBM SPSS Statistics Version 27を用い、尺度の項目について因子分析を行った。

3. 結果と考察

(1) 乳幼児の「身体活動に関わる保育環境尺度(試行版)」の構成要素

調査項目の36項目に対して、プロマックス回転・最尤法による因子分析を行い、固有値と解釈可能性を考慮して3因子を抽出した。どの因子においても因子負荷量が0.35未満を示した6項目を削除して再度因子分析を行い、最終的に30項目を採用した。最終的な因子パターン及び因子間相関を表4に示す。尺度内の内的整合性を検討するため、因子毎にCronbachの α 係数を求めたところ、第1因子が.91、第2因子が.91、第3因子が.83であり、いずれの因子も内的一貫性が示された。

第1因子は「専門家の支援を得た発達についての評価・計画」「身体活動と健康に関する保護者との情報共有」「興味・関心に応じた内容や設定の構成・再構成」をはじめとした12項目で構成された。この因子は保護者との情報

表3 「身体活動に関わる保育環境尺度(試行版)」のカテゴリ(項目数)と項目例

カテゴリ(36)	詳細	項目例
物的環境 (13)	屋内(5) 戸外(3) 物(5)	乳幼児のために、有効に保育室や廊下などの園舎の空間が活用されている 戸外に乳幼児が占有して粗大運動遊びができる場がある 乳幼児にとって適切な設備や遊具(固定、移動)、教材を自由に十分に使って活発に遊べる
人的環境(内部) (10)	子ども(2) 保育者(8)	乳幼児は、遊具や材料、活動(遊び)を自分で選び、主体的に取り組んでいる 保育者が、手本を示すなど乳幼児が新しい動きを獲得したり、むずかしい遊びに挑戦したりするように助ける
人的環境(外部) (7)	保護者(4) 専門家(3)	保育者は、乳幼児の体を動かすことのプロセスを評価する際に、保護者の考えを定期的に求めている 保育者は、乳幼児の発達の遅れが認められた場合、必要に応じて専門家の支援を得て、評価し計画を立てている
記録・計画・評価 (6)	記録(2) 計画・評価(4)	保育者は、乳幼児の微細運動・粗大運動スキルの発達を写真、ビデオ、オーディオ、観察ノート等によって記録し、その成長を観察している 保育者は、観察した乳幼児の身体発達を評価して、カリキュラムの枠組みや発達の指標と関連づける

共有や専門家の助言、記録・評価に関する項目が高い負荷量を示したことから、「外部の関与と計画評価」と名付けた。

第2因子は「遊びを肯定的にとらえた保育者のやりとり」「活発に身体を動かす適切な遊びの主導」「安全確保の見守り」等の9項目から構成された。園生活や遊びに対する保育者の関わりに関する項目が高い負荷量を示したことから、「保育者の関わりと子どもの状況」と命名した。

第3因子は「戸外に出易い空間」「遊具や材料、遊びの選択と主体的な取り組み」「道具や遊具を体系化した構成【屋内・戸外】」等の9項目から構成された。本因子は遊具や教材、空間、機会に関する項目が高い負荷量を示したことから、「物的環境と空間・機会」と命名した。

第2因子の中の9項目は、「人的環境（内部）」を評価するために作成した項目、第3因子9項目は「物的環境」を評価するために作成した項目であり、項目を検討した際に想定したカテゴリとほぼ同様であった。一方、第1因子の項目は、「人的環境（外部）」と「記録・計画・評価」の両方の項目から構成されていたことから、これらは同じ項目群だととらえられる。幼児初期の身体活動に関わる保育環境は、これら3つの因子から構成されていることが見出された。

(2) 各因子の下位尺度得点の傾向

各因子の下位尺度平均得点は、第1因子が2.62、第2因子が3.18、第3因子が2.74であり、第2因子の「保育者の関わりと子どもの状況」の各尺度得点が他の因子の得点よりも高いことが見出された。

次に3因子の因子間相関を検討した(表4)。第1因子「外部の関与と計画評価」と第2因子「保育者の関わりと子どもの状況」が.579となり、正の相関があった。また、第1因子「外部の関与と計画評価」と第3因子「物的環境と空間・機会」が.438であり、正の相関があった。第2因子「保育者の関わりと子どもの状況」と第3因子「物的環境と空間・機会」は.394であり、弱い正の相関があった。

この結果から、物的環境から身体にかかわる保育環境の構成要素は、それぞれが独立して成り立つものではなく、3つの因子が関係しあって成り立っていることが見出された。

さらに各項目を詳細に検討したところ、第1因子の項目「専門家の支援を得た発達についての評価・計画」は、第2因子と.603の相関がみられ、保育者と子どもとの関わりに影響を与えていた。また第1因子の項目「専門家を含む全ての人の評価、計画のプロセス関与」は、第2因子とは.480の正の相関、第3因子とは.279の弱い相関があった。

大豆生田ら(2009)や秋田ら(2007)の研究では、高い質の保育実践を目指すために計画や振り返り、また専門家等の第三者を交えた体制を作り、研修することが必要であると述べられている。本研究の結果から、幼児の身体活動場面においても、計画的組織的な取り組みと物的環境・人的環境とが深く関わっており、幼児の身体活動の環境に意識して取り組むことが必要であることが見

出された。

(3) 身体活動に関わる保育環境と保育経験年数・担当年齢クラスとの関連

保育経験年数、担当年齢クラスと保育環境の3因子の関連を検討した。身体活動に関わる保育環境3因子を独立変数に、担当年齢クラス・経験年数群を従属変数にしてそれぞれ重回帰分析を行った。その結果、保育経験年数、担当年齢クラスの両方共に、身体活動に関わる保育環境に対して有意な寄与はみられなかった。

経験年数との関連については、「プログラム評価のために保護者の考えを定期的に求める」の項目のみ、経験年数による有意な差が出現した($F(2,52) = 2.52, p < .01$) (図1)。経験年数2~4年の保育者は、「あてはまる」4(40.0%)であり、「あまりあてはまらない」6(60.0%)、「全くあてはまらない」0(0.0%)であり、保護者の考えを全く求めないと回答した保育者はおらず、意見を求めるとの回答が4割だった。それに対して経験年数5~9年の保育者は、「あてはまる」3(12.5%)、「あまりあてはまらない」12(50.0%)、「全くあてはまらない」9(0.0%)であり、保護者の考えを求めると答えた保育者は、2~4年の保育者よりも少なかった。経験年数10年以上の保育者では、「あてはまる」6(35.8%)、「あまりあてはまらない」9(47.4%)、「全くあてはまらない」4(21.1%)と、「保護者の考えを求めると答えた割合は2~4年の保育者よりも少なく、5~9年よりも多かった。

経験年数によって保護者との関係性が異なる可能性が示唆されるが、経験年数と保護者に考えを求めると答えた割合が単に増加や減少しているわけではなかった。保護者に求める内容やその目的は、保育者によって異なる可能性もある。

また本調査では調査対象人数が少なかったため、経験年数が要因ではなく個人の考え方がより強く反映されている可能性を否定できない。さらに人数を増やしてさらに検討する必要がある。

4. まとめと今後の課題

本研究では、3歳未満である幼児期初期の子どもの「身体活動に関わる保育環境尺度(試行版)」を「物的環境」「人的環境(内部)」「人的環境(外部)」「記録・計画・評価」の4つのカテゴリを軸に作成し、保育者を対象に試行した。その結果、ほぼすべての項目で回答が得られ、「答えられない」「わかりにくい」等のコメントは殆どなかった。3歳未満児のクラス担任だけでなく、3歳以上児クラスの担任や主任等からも同様の回答が得られたことから、評価項目の記述や選定は適切であったと考えられる。

質問紙の構成要素を検討するために因子分析を行った結果、「外部の関与と計画評価」「保育者の関わりと子どもの状況」「物的環境と空間・機会」の3因子が見出された。これら3つの因子は、それぞれ正の相関が見られた。特に遊具や空間などの「物的環境」や「保育者の関わり」は、「外部の関与と保育計画」の因子と強く関連していた。

表4 「身体活動に関わる保育環境尺度（試行版）」の因子分析結果と各項目平均（プロマックス回転）

項 目	項目平均（標準偏差）	因子		
		1	2	3
第1因子：外部の関与と計画評価（12項目）[$\alpha=.91$]				
専門家の支援を得た発達についての評価・計画	2.83 (.834)	<u>.905</u>	-.086	-.148
専門家を含む全ての人の評価，計画のプロセス関与	2.20 (.904)	<u>.811</u>	-.127	-.162
身体発達，関心やニーズの評価に応じた計画とその活用	2.79 (.498)	<u>.771</u>	-.019	.053
身体活動と健康に関する保護者との情報共有	2.58 (.633)	<u>.734</u>	-.103	.037
体の動きに関する専門機関へ助言依頼	2.77 (.831)	<u>.690</u>	.165	-.130
微細運動・粗大運動スキルの発達の記録と観察	2.44 (.925)	<u>.658</u>	.056	.079
身体遊び中の子どもたちのやりとりの記録	2.77 (.697)	<u>.653</u>	.187	-.089
身体発達評価とカリキュラムや発達指標との関連づけ	2.79 (.567)	<u>.631</u>	.346	.035
興味・関心に応じた内容や設定の構成・再構成	2.79 (.532)	<u>.556</u>	.206	.152
保護者との情報を計画に反映	2.38 (.686)	<u>.547</u>	.069	-.032
プログラム評価のために保護者の考えを定期的な依頼	2.00 (.707)	<u>.497</u>	-.255	.247
保護者への意思確認，外部の専門機関照会への共同判断	2.82 (.740)	<u>.432</u>	.385	.060
第2因子：保育者の関わりと子どもの状況（9項目）[$\alpha=.91$]				
遊びを肯定的にとらえた保育者のやりとり	3.22 (.538)	-.121	<u>1.043</u>	-0.203
動きの獲得や遊びの挑戦への援助	3.31 (.605)	-.062	<u>.870</u>	-.330
微細運動スキルの発達を促す支援	3.06 (.627)	.045	<u>.744</u>	.118
活発に身体を動かす適切な遊びの主導	3.11 (.599)	-.001	<u>.744</u>	.077
粗大運動スキルの発達を促す支援	3.17 (.575)	.162	<u>.712</u>	-.062
発達にふさわしい体を動かす経験の計画	3.06 (.564)	.021	<u>.590</u>	.247
十分に体を動かす	3.06 (.627)	-.148	<u>.577</u>	.305
身体を動かす遊びへの励まし	3.35 (.619)	-.030	<u>.502</u>	.027
安全確保の見守り	3.33 (.614)	.192	<u>.459</u>	.134
第3因子：物的環境と空間・機会（9項目）[$\alpha=.83$]				
戸外に出易い空間	3.00 (.962)	-.012	-.070	<u>.814</u>
遊びや場所の選択【園庭・戸外】	2.69 (.858)	-.250	.029	<u>.796</u>
粗大運動遊びで占有できる場【戸外】	2.35 (.075)	.233	-.185	<u>.598</u>
適切な設備や遊具（固定，移動），教材の使用	2.67 (.668)	.045	.043	<u>.568</u>
指先を使った遊びがじっくりできる場	2.40 (.735)	.049	.102	<u>.538</u>
遊具や材料，遊びの選択と主体的な取り組み	2.87 (.584)	-.027	.356	<u>.516</u>
園舎の有効的な空間活用	2.89 (.685)	.008	-.119	<u>.500</u>
道具や遊具を体系化した構成【屋内・戸外】	2.51 (.674)	.283	-.116	<u>.485</u>
戸外での遊びや散歩の機会	3.58 (.599)	-.268	.121	<u>.431</u>
	因子間相関	I	II	III
	I		.579	.438
	II	.579		.394
	III	.438	.394	

第三者である外部者と関与することや，保育の計画・記録が，物的環境や保育者の関わりである人的環境（内部）の保育実践と関連していることが見出された。

担当クラスと各因子，経験年数と各因子とは，有意な関連を見出すことはできなかった。しかし，保護者に関する項目では経験年数と関連する傾向があったことから，さらに詳細に検討することが必要だろう。

今後の課題は，以下のとおりである。

(1) 本調査は，3歳未満である幼児初期の「身体活動に関わる保育環境」の構成要因を検討するための試行調査としての位置づけであったため，さらに人数を増や

して調査を実施し，詳細な分析を行うことが必要である。

(2) 「3歳未満児クラスの保育」を念頭に3歳以上児クラス担当を含めたすべての保育者に回答してもらったが，3歳未満児の身体活動環境の実態と課題を明らかにするためには，3歳以上児の身体活動環境と比較して保育環境の共通点や，年齢クラス等によって異なる点を明らかにすることが求められる。

(3) 実際の保育の中で身体活動の特徴を反映する項目や保育実践以外の項目も検討し，評価項目を精緻化することが求められる。

以上3点の課題に関し，今後検討を重ねて，乳幼児の

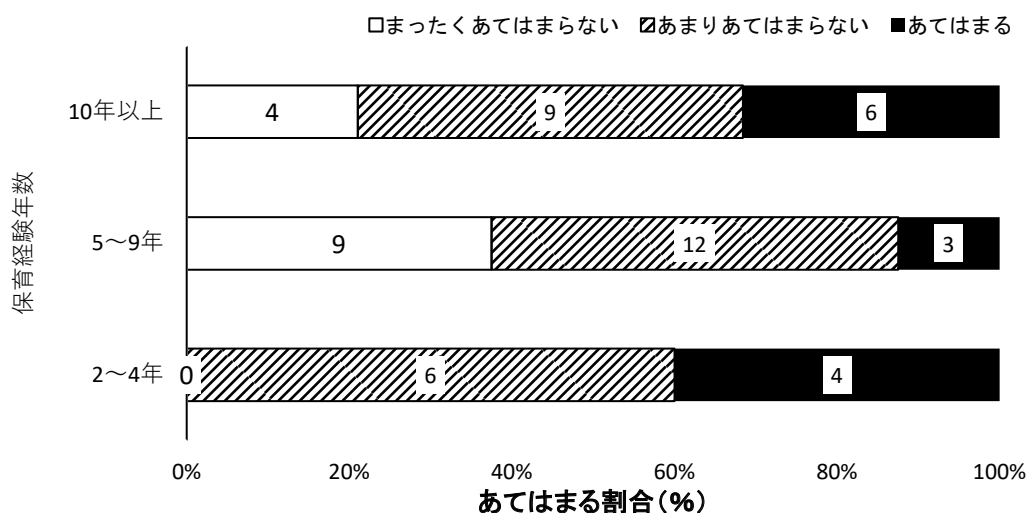


図1 「プログラム評価のために保護者の考えを定期的に求める」項目の保育経験年数別の回答の割合

「身体活動に関わる保育環境尺度」の作成の実現を目指したい。

引用文献

- 秋田喜代美 2016 保育・教育の質が幼児・児童の発達に与える影響の検討 平成23-27年度科学研究費補助金(基盤研究(A))報告書
- 秋田喜代美・箕輪潤子・高櫻綾子 2007 保育の質研究の展望と課題 東京大学大学院教育学研究科紀要 47, 289-305.
- 秋田喜代美・辻谷真知子・石田佳織。宮田まり子・宮本雄太 2019 園庭環境に関する研究の展望 東京大学大学院教育学研究科紀要, 58, 495-533.
- Archer Carol & Siraj Iram 2016『保育プロセスの質』評価スケール 秋田喜代美・淀川裕美訳 明石書店(STTEW: Sustained Shared Thinking and Emotional Well-being, 2015)
- Archer Carol, Siraj Iram 2018「体を動かす遊びのための環境の質」評価スケール 秋田喜代美他訳 明石書店(MOVERS: Movement Environment Rating Scale, 2017)
- Harms Thelma, Cryer Debby, Clifford Richard M., Yazejian Noreen 2018 新・保育環境評価スケール2(0・1・2歳)埋橋玲子訳 法律文化社(ITERS: Infant/Toddler Environment Rating Scale, 2017)
- 長谷川恵美・定行まり子 2020 保育所における1歳児の歩行と建築環境の関係に関する研究 日本女子大学大学院紀要家政学研究科人間生活学研究科, 26, 67-75.
- 「保育プロセスの質」研究プロジェクト 2010 子どもの経験から振り返る保育プロセス 明日のより良い保育のために(SICS: Well-being and involvement in care process-oriented Self-evaluation Instrument for Care Settings, Laevers Free, 2003)
- 石沢順子・松崎洋子・無藤隆 2018 2歳児クラスの子どもの身体活動量 日本保育学会第71回大会発表論文集, 1061.
- 松崎洋子 2019 幼児初期の子どもの基本動作発達と保育環境～3保育所の比較～ 日本乳幼児教育学会第29回大会論文集, 122-123.
- 松崎洋子・石沢順子・土橋久美子2021 乳幼児期の身体活動に関わる環境についての研究(1)—保育環境における評価スケールの比較—千葉大学教育学部研究紀要, 69, 145-151.
- 文部科学省 2012 幼児期運動指針 https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/undousisin/1319771.htm (2021/10/15閲覧)
- 長江美津子・伊藤博美 2018 子どもの育ちを支える環境構成の在り方—A市の保育士研修の振り返りを通して—名古屋経済大学教職支援室報, Vol. 1, 157-168.
- 野中壽子・小泉大亮・穂丸武臣・張琬婧 2017 保育所における園庭と園外での外遊びの活動状況 発育発達研究, 74, 19-25.
- 大豆生田啓友・三谷大紀・高嶋景子 2009 保育の質を高める体制と研修に関する一考察 関東学院大学人間環境学会紀要, 11, 17-32.
- 坂上裕子・金丸智美 2017 母子遊びにおいて観察された未就園2歳児の基本的動きの経年変化—2004・2005年度と2010・2011年度の比較— 保育学研究, 55(1), 19-30.
- 汐見稔幸・村上博文・松永静子・保坂佳一・志村洋子 2017 乳児保育室の空間構成と“子どもの行為及び保育者の意識”の変容 保育学研究, 50(3), 298-308.
- 杉原隆・森司朗・吉田伊津美 2004 幼児の運動能力発達の年次推移と運動能力発達に関与する環境要因の構造的分析 平成14-15年度文部科学省科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書
- スポーツ庁 2019 令和元年度全国体力・運動能力・運動習慣等調査結果の概要について https://www.mext.go.jp/sports/content/20191225-spt_sseisaku02-000003330_1.pdf (2021/10/15閲覧)
- 鈴木和弘 2017 幼稚園・保育所および学校における身体活動・運動を促進するための取り組み 体育の科学, 67(3), 166-172.

- 庄司亮子・飯村敦子・小林保子・袴田優子・竹内麗子・河合高鋭・原秀美・山崎奏名子・岩羽紗由実・小林芳文 2019 低年齢児保育における動的環境の検討：感覚運動発達の育ちを巡って 保育科学研究, 10, 29-45.
- Tannock Michelle 2014 Physical Play and Development. In Elizabeth Brooker, Mindy Blaise, & Susan Edwards (Eds.), SAGE Handbook of Play and Learning in Early Childhood. SAGE Publications. 252-263.
- World Health Organization 2019 Guidelines on physical activity, sedentary behavior and sleep for children under 5 years of age. World Health Organization.
- 山下 晋・鳥居恵治 2016 保護者の意識変化が幼児の運動能力に及ぼす影響 岡崎女子短期大学紀要, 49, 75-79.
- Yip C.J., Levine H.M., Lauricella R.A. & Wartella E. 2015 Early Learning and Healthy Development in a Digital Age. In Farrell Ann, Kagan S.L., & E. Kay M. Tisdall (Eds.), The handbook of Early Childhood Research. SAGE Publications. 398-418.
- 横山真貴子・長谷川かおり・竹内範子 2012 幼稚園の4歳児クラスにおける環境構成と保育者の援助のあり方：新入児と進級児の環境移行に着目して 奈良教育大学 教育実践開発研究センター研究紀要, 21, 45-54.

付 記

本研究は、令和3（2021）年度科学研究費助成事業（学術研究基金助成金）（課題番号：20K02698）を受けて実施した研究の一部である。

本論文は、日本保育学会第74回大会において発表したものを、加筆・修正したものである。